

歴史災害から見る名古屋〔名古屋市域の土地の成り立ち〕

名古屋市の土地の成り立ちと想定被害

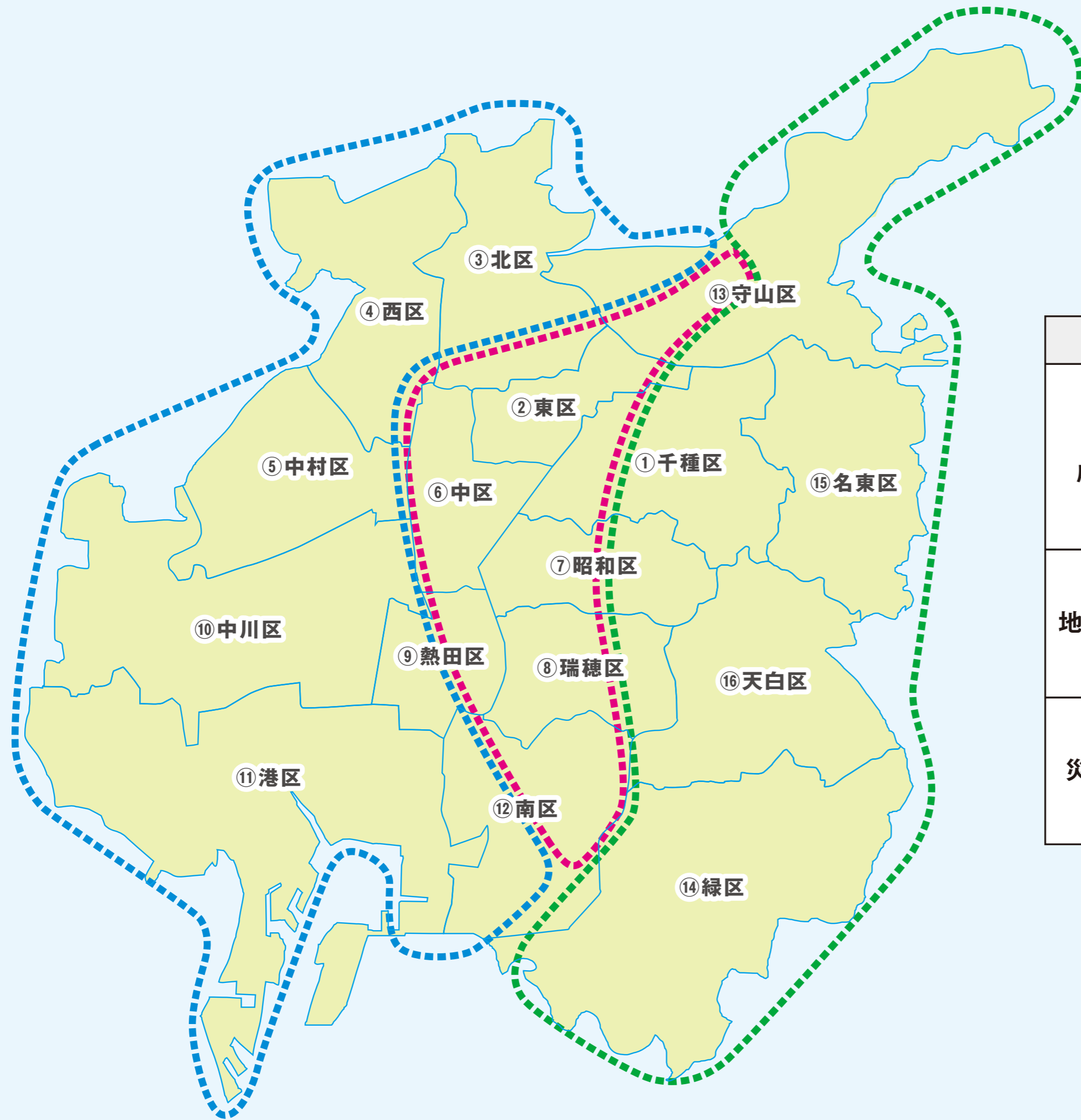
自分の住む地域がどのような経緯で現在の地形になったかを知ることにより、今後の災害への備えや避難行動時に役に立てることが出来ます。土地に伝わる歴史、地名から土地の成り立ちを知り、居住地域における防災について考えてみましょう。

現在の名古屋市の地形は、大きく3つ（西部の沖積平野、中央部の台地、東部の丘陵地）に分けられます。

西部の沖積平野は、海面の上昇・下降により海底が陸地となった地域、河川からの土砂が堆積した地域、江戸末期から明治にかけて行われた干拓などにより、新田として開発された地域など比較的新しい地盤のために強度が弱く、地震発生時に揺れが大きくなり、液状化の可能性が高まると言われています。

中央部の台地は、急速な都市化に伴い、大雨が降った際の内水氾濫や埋め立てによる液状化の可能性が高いと言われています。

東部の丘陵地には、宅地化を進めた際のため池などの埋め立てや丘陵地を平坦化するための盛土などによる軟弱な地盤が潜在しています。また、丘陵地のため地震や大雨などによる土砂崩れなどの可能性も考えられます。



	西部(沖積平野)	中央部(台地)	東部(丘陵地)
土地の成り立ち	<ul style="list-style-type: none"> ● 河川土砂堆積による平野形成 ● 新田開発(干拓) ● 都市開発(埋め立て) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 集落の形成 ● 西側は市街地 ● 東側は畑 	<ul style="list-style-type: none"> ● 里山(農地、ため池、雑木林) ● ため池灌漑(田・畑) ● 林端への集落形成 ● 切土・盛土(宅地化)
地形的特徴	<ul style="list-style-type: none"> ● 湿地、干潟(土質軟弱、水はけ不良) ● 自然堤防(河川氾濫等による形成) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 起伏があまりない ● 熱田層(上部砂層、下部粘り層) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 起伏が激しい ● 砂礫層 ● 粘土層
災害リスク	<ul style="list-style-type: none"> ● 液状化 ● 河川洪水 ● 津波浸水 ● 長期湛水 	<ul style="list-style-type: none"> ● 内水氾濫 ● 液状化 	<ul style="list-style-type: none"> ● 内水氾濫 ● 液状化 ● 土砂災害 ● 滑動崩落

<p>①日本とタイ交流の証「日泰寺」(千種区)</p> <p>日泰寺はタイ王国から寄贈された仏舎利(お釈迦様の遺骨)を安置するために建てられたお寺です。寺内にある「関東大震災犠牲者追悼之碑」は伊勢湾台風時に被災しましたが、有志により再建されました。</p>  <p>【日泰寺山門】</p>	<p>②橋がないのに「砂田橋」(東区)</p> <p>東区砂田橋の名前の由来は、この付近にあった橋の名前が由来で、橋が存在した大幸川は市道大幸線の拡幅整備とともに姿を消してしまいましたが、砂田橋という地名がこの付近に川があったことを語り継いでいます。</p>  <p>【堀川に接続される旧大幸川】</p>	<p>③海の神様を祀る「綿神社」(北区)</p> <p>北区といえば内陸部のイメージですが、区内の綿神社で祀られている「綿津見」は九州を中心に活動した海洋民族の海の神様にあたり、彼らがこの地に居住していた可能性が神社の由緒書に記されています。</p>  <p>【元志賀町2丁目にある綿神社】</p>	<p>④防火の道「四間道」(西区)</p> <p>名古屋国際センター北東に位置する「四間道」は、江戸時代の大火にて大きな被害を受けたため、防火のために道幅を四間(約7m)に広げました。その教訓から家屋の屋根の上に神社が乗った「屋根神様」が見受けられ、防災を祈願したとされています。</p>  <p>【飾られていた屋根神様】</p>
<p>⑤豊臣秀吉ゆかりの地「豊国神社」(中村区)</p> <p>中村公園内にある豊国神社は、豊臣秀吉生誕の地として秀吉を祀った神社です。豊国神社は、明治18年に創建されましたが、昭和34年の伊勢湾台風で大きな被害を受けました。</p>  <p>【中村公園内の豊国神社】</p>	<p>⑥文化財を守る「大須観音」(中区)</p> <p>多くの文化財を所蔵する大須観音は、もともと尾張国岡崎(現在の岐阜県羽島市)にありましたが、河川に囲まれ、洪水の危険性が高かったため、徳川家康が文化財を守るために水害の少ないこの地に移したとされています。</p>  <p>【大須観音の本堂】</p>	<p>⑦水が流れていた「鶴舞」(昭和区)</p> <p>鶴舞はもともと「ツルマイ」ではなく「ツルマ」であり、「水が流れる間」という意味で名付けられた地名と言われています。現在では、この付近に水が流れていたことは確認できませんが、地名から水の流れがあったことが分かります。</p>  <p>【現在の鶴舞公園】</p>	<p>⑧陸地に浮かぶ島「浮島町」(瑞穂区)</p> <p>「尾張名所図会」には熱田区側から見た浮島が描かれており、浮島町付近は、昔から人家等が流されるような洪水や高潮があっても、ここだけは浮き上がり、被害がなかったと記されています。</p>  <p>【尾張名所図会に描かれた浮島】</p>
<p>⑨東海道海上の道「七里の渡し」(熱田区)</p> <p>東海道の熱田宿～桑名宿間は唯一の海上の道であり、「七里の渡し」と呼ばれていました。七里の渡しの船着場跡は、現在の内田町にある「宮の渡し公園」辺りで、市南部に新田が出来る前は、ここから三重県桑名市まで船が往来していました。</p>  <p>【東海道海上の道「七里の渡し」】</p>	<p>⑩尾張四観音の一つ「荒子観音」(中川区)</p> <p>荒子地区にある荒子観音は尾張四観音の一つであり、明治時代に起きた濃尾地震で本堂が倒壊しました。「荒子」という地名は、もとは「新処(あらこ)」と言われており、新しく開拓した土地を意味しています。</p>  <p>【荒子観音の山門】</p>	<p>⑪高潮に悩まされた「小川」(港区)</p> <p>「水口屋文書」によると、小川地区は江戸後期から明治中期にかけて呉服商が新田として開拓したことが記録されており、高潮などにより堤(堤防)が何度も破損した記録が残されています。</p>  <p>【高潮被害が記された「水口屋文書」】</p>	<p>⑫道義を以て得を施す「道德」(南区)</p> <p>道德地区は、江戸時代に御替地新田を「道德新田」と名を改めたのが由来で、御替地新田はもともと尾張藩が農民のために替地として与えたものですが、その方針が「道義を以て徳を施す」であったことから「道德」という名前に変えたとのことです。</p>  <p>【農民の守護神を祀った道德稲荷神社】</p>
<p>⑬輪中の町「瀬古」(守山区)</p> <p>瀬古地区は大雨により家屋が長期間浸水したことから、集落を堤防で囲んで守っていました。また、この地域には石垣を高く積んだ「水屋」が残っており、昔から水害に備えていたことが伺えます。</p>  <p>【今も残る「水屋」】</p>	<p>⑭海鳴りが聞こえる「鳴海」(緑区)</p> <p>現在、鳴海地区は内陸部にありますが、「鳴海」の語源はかつてこの地が海岸に近く、海鳴りや波の音にまつることからこの名前が付いたとされ、鳴海地区から眺めた海を読んだ歌も残されています。</p>  <p>【尾張名所図会に星崎から眺めた鳴海地区】</p>	<p>⑮安住の地を求めて「極楽」(名東区)</p> <p>昔、名古屋市の西側の低地帯で度重なる洪水に遭った住民が安住の地を求めて山深からず、水多からずの高針の地を目指し、辿り着いたこの地区を「極楽」と呼んだと言われています。</p>  <p>【極楽地区に隣接する猪高緑地】</p>	<p>⑯山から聞こえた音「音聞山」(天白区)</p> <p>天白区の音聞山は、鳴海の海辺に打ち寄せる波の音が聞こえたことにより、「音聞山」になったと言われています。この近辺も海に近かったことが分かります。</p>  <p>【尾張名所図会に描かれた音聞山】</p>